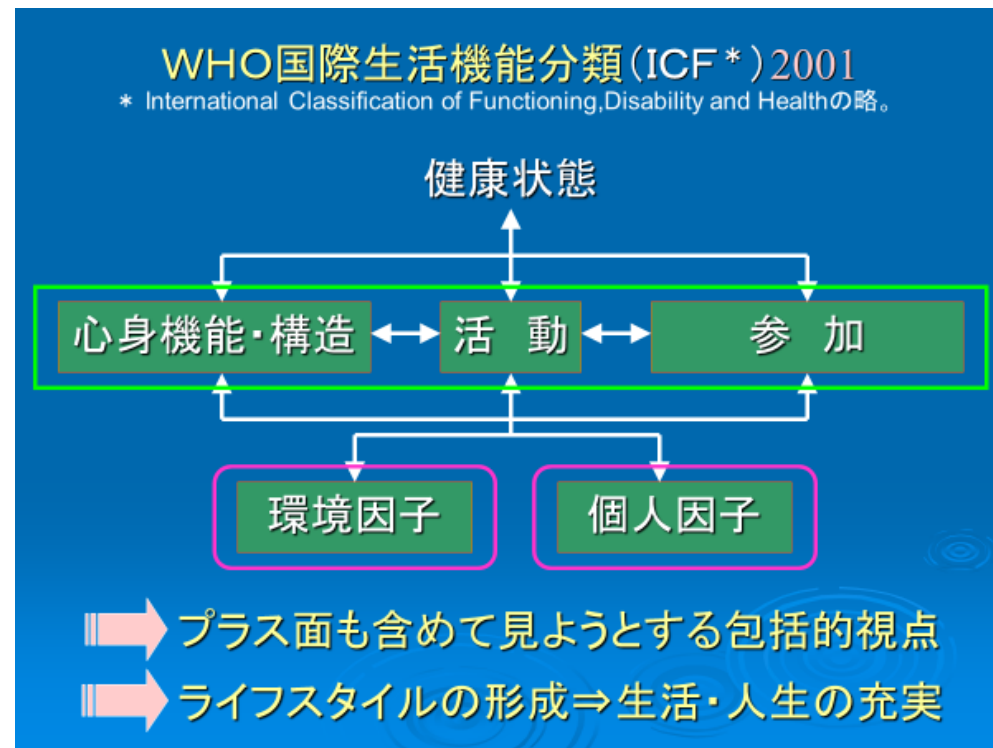


ライフステージに応じた支援 青年期前後を支える—社会資源等の活用



- 青年期前後のこの時期を支える上で、学校の果たす役割が大きいことは言うまでもありませんが、更に、地域の専門機関・専門職・支援システムなどと連携し、社会資源を活用することが重要です。
- 「学習チューター」（長野市）は、地域の教員養成系・心理系の学生が小・中学校に派遣されて、集団の場で、または、相談室など別室で、個別支援に当たるシステムです。今般のコロナ禍で、各学校はオンライン会議システムを導入したため、今後、家庭にいる子どもに対して、リモートアクセスでかかわることも可能になります。
- 「若者サポートステーション」（略称：サポステ）は、働くことに踏み出したい若者（15～49歳）たちと向き合い、本人や家族だけでは解決が難しい「働き出す力」を引き出し、「職場定着するまで」全面的にバックアップする厚生労働省委託の支援機関です。
- 「障害者就業・生活支援センター」（略称：中ポツセンター）は、障害者の職業生活における自立を図るため、雇用、保健、福祉、教育等の関係機関と連携して、障害者の身近な地域で就業面及び生活面の支援を行い、障害者の雇用の促進及び安定を図る支援機関です。
- ほか、障害者職業センター、まいさぼ、ひきこもり支援センター（ひきこもりサポーター）などの支援機関が、卒後も対応します。

⑥ 肯定的自己像が人生の道しるべ ～自分探しの旅路に生きがいを求めて～

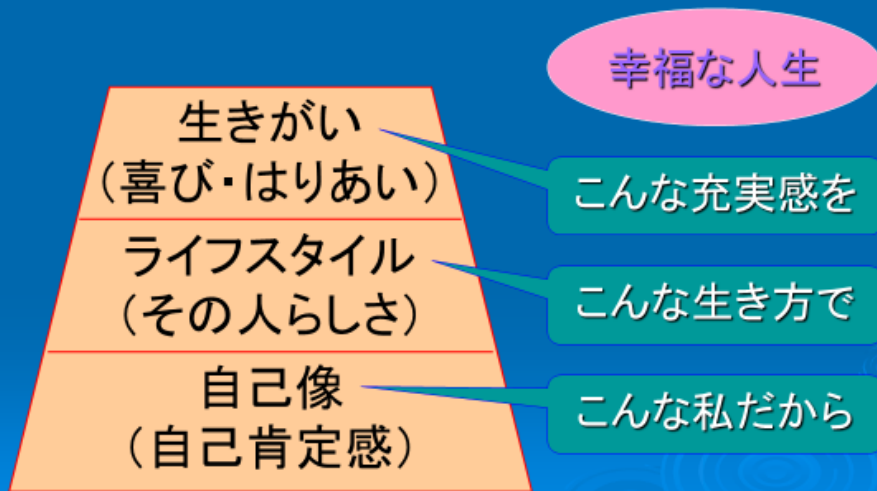


今世紀初頭の2001年、WHOによって、国際生活機能分類（ICF）が制定され、「障害」に対する新たな見方、言わば、「21世紀の障害観」が提唱されました。その特徴を、一言で言えば、「障害」というものを、当事者個人の問題でなく、社会の問題として、更に、「障害」という負の側面だけでなく、「生活機能」という全体の中で、包括的に見ようとすることです。

また、「環境因子」と「個人因子」が重要な要素として加わった点も、大きな特徴です。その人の「環境」の中に生活の改善につながるヒントを見出し、「個人」の特性が「個性」として輝くために、その人らしい「生活」、その人らしい「生き方」の模索を積み重ねながら、「ライフスタイルの形成」、そして、「生活・人生の充実」を目指します。

長野圏域療育コーディネーター／言語聴覚士 安川 健治
〒380-0928 長野県長野市若里6-6-14 児童発達支援センター にじいろキッズらいふ
TEL 026-219-3781 業務携帯 080-8877-1709 E-mail k-yasukawa@nagano-shajikyo.or.jp

ライフスタイルの形成 人生設計の中核をなす

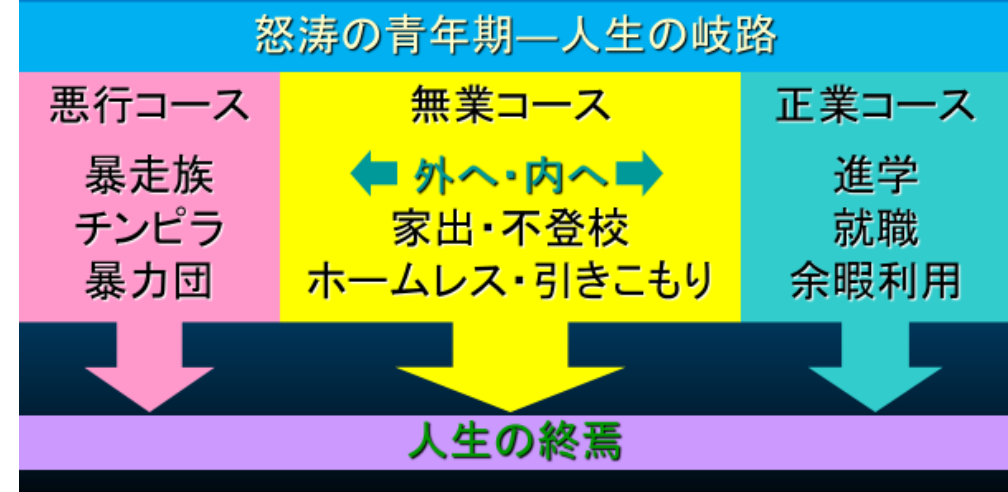


- 一般に、「ライフスタイル」とは、「人生観・価値観・習慣などを含めた個人の生き方」の意とされています。単に、「生活習慣」、「生き方」と言う場合よりも、「その人らしさ」、言い換えれば、「アイデンティティ」（自己同一性）とのかかわりが強調された意味合いの語として、用いられています。
- 「その人らしさ」とは、本人にとっては「自分らしさ」ですので、当然、「自分とはどのような人間か」というイメージ（自己像）と深くかかわっていると考えられます。
- そう考えますと、「ライフスタイル」は、幼児期・児童期から確立されているものではなく、青年期の自分さがしの旅を経て、自己肯定感*に裏打ちされた肯定的な自己像の上に形成され、その後も、ライフステージに応じて変化しながら、その人なりの「生きがい」へとつながっていくものであると考えられます。
- こんな私だから、こんな生き方で、こんな充実感を得たい、そういう意味での「人生設計」において、「ライフスタイル」は、その中核をなすものであると言えるでしょう。

* 自己肯定感は、成功体験によって培われると思われます。そのためには、イエローカード（警告）のように、いきなり大失敗（退場）としない救済措置も必要です。

ライフスタイルの形成過程

➤ドロップアウトの危機と隣り合いながら



- ところが、発達障害など、生きづらさを抱える子どもたちにとって、成功体験を積み重ねながら、自己肯定感を培うことは、なかなか容易なことではありません。
- その子どもたちが、乳・幼児期、児童期を経て、怒涛の青年期を迎えると、往々にして人生の岐路に立たされます。つまり、青年期というライフスタイルの形成過程においては、しばしばドロップアウトの危機と隣り合いながら、進んで行くことになります。
- 発達障害などのリスク要因があっても、幸いにして、適切な支援、理解ある友人など、環境因子に恵まれたり、本人自身の秀でた才能など、個人因子に有利な条件があったりすると、ドロップアウトすることなく、正業コースを進むことができるでしょう。
- しかし、たとえ、いったんはドロップアウトして、無業コース、悪行コースへと進みそうになったとしても、多くの場合、適切な対応によって、進路の修正は可能ですので、回復の可能性を信じて、粘り強く働きかけることが肝要です。
- それでも、大崩れしないうちに早めに対応し、小崩れで抑えながら進む方が、本人も周囲も楽ですので、幼少期からの早期対応、予防的対応こそ、重要であると言えます。